

「クラストー弾と 遷都450年」

ラオス大使

横田 順子



よこたじゅんこ

1972年南山大学卒業、外務省入省、タイ王国チュラロンコン大学にて研修、以後在タイ大使館および在シンガポール大使館で各2度在勤、アジア大洋州局南東アジア第一課地域調整官、大臣官房調査官、在チェンマイ総領事を経て、2010年9月より現職。東南アジア在勤では初めての女性大使。

この連載では、外交の最前線「フロントライン」で活動する外交官に、現地の様子を語っていただきます。今回は、日本と外交関係樹立55周年を迎えた国・ラオスの大使が登場します。

クラストーとは「房」を意味する英語で、一つのクラストー弾の中に300〜400個の野球のボール状のボンビー（子弾）が詰められている。この爆弾がベトナム戦争の間にベトナム国境沿いのホーチミンルートだったラオスの南部地域や北部のシエンクワン県を中心に広くばらまかれ、今も不発状態のまま約8千万個が地中10〜20センチのところにある。地雷と違って上を

歩く程度では爆発しないが、畑を耕すために振り下ろした鍬が当たったり、子どもたちが爆弾とは知らずにボール投げをしたり、その爆発の被害はこれまで5万人の犠牲者（死者2万9千人）を出し、現在も年間300人が犠牲になっっている。この不発弾を除去しない限り、ラオスでは農業も、学校や道路の建設もままならず、除去なく居住を始めて被害に遭う農民も後を絶たない。

このクラストー弾の廃絶に向けた国際条約（オスロ条約）が2010年8月に発効し、第1回の締約国会議がラオスの首都ビエンチャンで同年11月初旬に開かれた。未締約国も含め120カ国の代表、約1200人の参加者というラオス史上最大規模の国際会議である。会議の運営、参加者の受け入れ態勢など、開催日1週間前になっても詰まっていないことが多く、徳永外務大臣政務官（団長）が参加する日本としても担当館員はやきもきした。会議開催直前の土日に事が進むので、館員



徳永政務官によるシエンクワン県不発弾処理現場視察。(上)
国家主席府から凱旋門に向かうランサーン通り。(下)

も週末返上である。そんな中で会議が開催されたが、クラスター弾の汚染地への現場視察も含め、約1週間の会議日程は順調に進んだ。徳永政務官も正味2日間の滞在日程の中で、会議出席の他、副首相兼外務大臣、計画投資大臣、公共事業・運輸大臣などと個別に会談し、ラオスに進出している日系企業の代表やクラスター弾除去や被害者支援に貢献している日本のNGOの人

たちとも会って現場の意見を聞くなど、休み間のないスケジュールであった。この大会議の運営を無事乗り切ったビエンチャンの都は11月半ば、国家主席府から凱旋門に向かうランサーン通りを中心に華やかなイルミネーションが飾られ、普段と違う様相を呈していた。ビエンチャン王国最後のアヌウォン王像の除幕式、全国産品フェア、全国伝統舞踊祭、パシユート大会、ガラディナー、そして国立スタジアムでの祭典など盛りだくさんの記念行事が連日開催され、学校はすべて1週間休校、市内中心部には車乗り入れ規制がかけられた。この一連の行事こそラオス政府の威信をかけたもう一つの大行事、すなわちビエンチャン遷都450年祝賀行事である。今から450年前の1560年、ミャンマーからの侵攻を避けるため、王都を北のルアンパ

バーンからビエンチャンに遷都し、王宮、エメラルド仏を安置するための寺院など都の建設が行われた。1975年の社会主義革命で王制が廃止されるまで、ランサーン王朝の分裂、タイ王朝への帰属、仏領への編入、大戦後の独立、内戦と苦難の歴史を経験し、そして現在のラオス人民革命党による勝利、王国から共和国へ移行して35年のラオスは2020年の「開発途上国卒業」を最大の国家目標として経済社会開発を進めている。躍進するアジアの経済成長の流れに何周か遅れではあるが、追いつこうとするラオスには前述のクラスター弾被害をはじめ直面する課題は山ほどある。外交関係樹立55周年の日本に対しこれまでの支援案件を、切手や紙幣に取り上げるなど純朴な形で感謝の気持ちを示すラオスの人たちの期待をひしひしと感じる毎日である。